

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 21 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520504

研究課題名(和文) 形容詞語彙の使用パターンとその構造化に関する日仏語対照研究

研究課題名(英文) Contrastive study between French and Japanese on the usage pattern of adjectives and their grammatical structuration

研究代表者

藤村 逸子 (FUJIMURA, Itsuko)

名古屋大学・国際開発研究科・教授

研究者番号：50229035

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円、(間接経費) 810,000円

研究成果の概要(和文)：大規模な言語データにおいて観察される言語現象を人間の動的な言語使用の痕跡とみなす立場に立ち、言語使用と言語構造の関係の解明に向けて、日本語とフランス語の形容詞に関わる言語現象を定量的に記述した。対象の言語項目は、色彩、味覚、規模、発話モダリティに関連する形容詞である。言語の構造化に重要な役割を果たすのは、意識化の度合いが高い意味要因のほか、社会言語学的変異や通時的变化として同定される無意識の言語使用の傾向である。2言語の比較からは文化的要因の重要性が明らかである。また、本研究の過程で2語間の結びつきの強度を測る統計指標のlog-rを開発し、MIスコアと比較して前者の有用性を主張した。

研究成果の概要(英文)：Supported by the idea that the linguistic facts observable in large corpora are traces of linguistic activities of human beings, we made a quantitative description of linguistic phenomena concerning French and Japanese adjectives in order to ultimately elucidate the relationship between linguistic usages and linguistic structure. In dealing with adjectives of color, taste, dimension, modality in French and Japanese, we argued that the unconscious usages of linguistic entities, identified as sociolinguistic variants or diachronic changes play an important role in their structuring, alongside their conscious usages which are crucial in semantic distinction. The comparison of the two languages has led us to show the importance of cultural factors. In the course of this research, we developed a new log-r statistical index that measures the degree of connection between two words which is comparable to Mutual Information but more useful than this.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学 言語学

キーワード：フランス語 日本語 品詞 コロケーション 統計学的方法 名詞修飾 通時的变化

1. 研究開始当初の背景

一般にコーパスは、仮説検証を行うための例文発見のためのツールと考えられていた (corpus-based)。コーパスを人間の動的な言語使用の痕跡ととらえ、確率論的観点からコーパスそれ自体を研究対象とする (corpus-driven) 視点は支持されているとはいえなかった。

語彙論の分野で、語彙項目にはそれぞれ独自性があるがしかしながら全体として一定の法則性があるとの主張を具体的に検証した検証は数少なかった。

フランス語と日本語の形容詞は両言語の文法体系において扱いが大きく異なっている。日本語の形容詞は「用言」であり、述語性が高いのに対して、フランス語の形容詞は名詞に準ずる「体言」的なものである。また、形容詞と名詞との接続に関して日本語は種々の形式があるのに関して、フランス語は形式が単純である。このように異なった点のある言語間での対照研究は興味深いと同時に、いかに比較するかという悩ましい問題を抱えている。しかし、大規模コーパスに基づく研究を進めることによって、類型論的にかげ離れた言語を比較することも可能であると予測されていた。

言語使用を主たる分析対象とするコーパス言語学は、ある言語項目の出現を前後の文脈との関連から把握する方向を、計量のためのツールを開発してきた。統計指標も数多く開発されたが、万人にとって納得のいく方法論が確立していたわけではなかった。

2. 研究の目的

(1) フランス語と日本語の形容詞とその形態的バリエーションを対象とし、それらが使用される際の文法パターンとコロケーションパターンを、大規模コーパスに基づき量的および質的に記述する。多因子を仮定し、記述結果を分析する。日仏語間の比較を行う。

(2) パターンの頻度情報が言語を構造化する過程を、語彙化や文化化に関する議論も参照しつつ、モデル化する。

(3) コーパスで観察される現象を人間の動的な言語使用の痕跡とみなす立場に立ち、言語使用と言語構造の関係の解明のための標本として大規模コーパスを研究する方法を提案する。

3. 研究の方法

(1) 言語情報処理技術により大規模コーパスを処理し、取得した大規模なデータを統計学的手法により分析する。これにより従来の方法では不可能であった個々の語彙項目ごとの詳細な観察が可能となる。本研究では、コーパスを仮説検証のための演繹的ツールとして使う (corpus-based) のではなく、標本として機能的分析の対象とする (corpus-driven)。ビッグデータの分析から得られた知見は従来の方法では取得し得な

い新規性に富んだものとなる。その際に重要なのは研究方法の精密化・厳密化である。また、データ分析では工学的・数学的発想のみならず、人文学の視点、すなわち歴史や文化の視点を重視することも必要である。

以上のように電子的手続きに基づく方法が可能となったため、書き言葉を対象とする限り、データの取得は極めて容易になった。しかし、研究の方法論は細分化の方向をたどり、また研究者はグローバル化して、今では国際的な場面での議論が必要不可欠となっている。本研究の期間中に、研究代表者は13件の口頭発表を行ったが、そのうち、海外の国際学会での発表は9件にのぼる。多数の研究者と研究交流を行い、本研究の成果を国際レベルで議論し、さらに研究をすすめるという循環に加わることができたと言える。

4. 研究成果

以下の7種類に大別できる研究対象について研究を行い、成果を得た。

(1) 色彩語が形容詞である場合とそうでない場合の意味の差

新聞などのメディアのテキストにおけるフランス語の色彩形容詞の役割を大規模コーパスにおいて検証した。メディアにおける色彩語の役割は日本語とフランス語では大きな差異があり、色彩形容詞には「挿絵」のような効果を与える機能がある。その原因としてフランス語では色彩語はほぼ常に形容詞であるのに対して日本語では、接頭辞などの語構成要素から形容詞までの広い範囲にわたることが挙げられるとした。フランス語では、結びつきの極めて強い2語もそうでない2語と同様に、名詞+形容詞として表現される。(学会発表 と)。

(2) モダリティ表現と通時的変化

日本語のモダリティを示す補助形容詞の「そうな」と「みたいな」の話し言葉における使用傾向を通時的に観察した。コーパスは歴史的コーパスと現代の話し言葉コーパスを用いた。歴史的コーパスの時代別データと、話し言葉コーパスの話し手の年代別データは連続性があり、通時的変化が同一の時期の年代別バリエーションとして存在することを明らかにした。また「見たような」から語彙化した「みたいな」の意味にはこの元の名残が残存しており、言語は歴史的な変遷が蓄積された構築物であることを主張した (学会発表)

(3) 味覚表現と文化

日本語の「甘い」には、味覚表現以外に否定的意味の用法がある(「甘い考え」「甘い男」)が、これはフランス語やその他の世界の言語には見られない意味拡張である。データの分析から日本の食生活には、フランスや他の地域の文化には存在しない強いジェンダーバ

イヤスが存在していたことがこの意味拡張の理由であることを、文化人類学、人文地理学などの知見も引用しつつ主張した。(学会発表、)

(4) 大小を表す形容詞の文法形式
「大きい/な」「小さい/な」の使用について歴史的コーパスを利用して通時的視点から調査し、語の歴史が現代の語の使用傾向に多大な影響を与えていることを明らかにしつつある。フランス語の大小を表す形容詞について数年前に研究を発表しているため、比較が可能である。

(5) 形容詞と名詞の結合度と脳内処理
フランス語の形容詞と名詞の結合度を大規模コーパスにおける使用頻度から推定し、結合度とネイティブスピーカーの言語処理のスピードは有意な相関があることを視線計測装置を使った実験によって共同研究者とともに明らかにした。同じ方法によって、日本語母語とするフランス語学習者においても同様の傾向があることを示した。ドイツ語についても同様の傾向が観察され、コーパスデータをもとにして、人間の言語活動を推定する方法は言語研究において有効であることを確認することになった。(論文、学会発表、)

(6) 2語間の結合度の指標: Log-r の開発
2語の結びつきの強度を測る指標として、一般に評価を受け、大変しばしば利用されているMI スコアには大きな欠点があることを大規模データを基に明らかにし、それに替わるものとして統計学者と共同して「Log-r スコア」を開発した。Log-r は、単なる頻度と同様に簡素で透明度の高い指標であり、この二つを組み合わせることによって、連語の特徴付けが容易にできることを示した。(学会発表、)

(7) 日本語の話し言葉に関する研究
以前の科研で作成した日本語話し言葉コーパスを利用し、日本語の話し言葉と書き言葉の差異、人間をカテゴリーに分ける際のポライトネスの問題、話の参加者の関係の関わりと終助詞の用法に関して記述研究を行った。同時に、コーパス使用にまつわる方法論的な試みでもあった。(学会発表、 著書)

(8) フランス語書き言葉コーパスを対象とした頻度と規則性に関する研究
頻度が高い表現は不規則性が高いことを、名詞の文法的性を題材にして検討した。(学会発表)

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

g 山下淳子, 梁志鋭, 母語と第二言語における連語表現の処理の相違について ドイツ語の連語表現に関する視線計測研究, LET 中部支部研究紀要 24 号, 査読あり、2013, 47-56

[学会発表](計 13 件)

. FUJIMURA, Itsuko, La politesse et la catégorisation des humains: observation des usages de noms humains japonais dans de gros corpus numériques, NHUMA 6, 2014.03.14, Université de Strasbourg.

. FUJIMURA, Itsuko, & BAUMERT, Nicolas, Question de langue, question de culture: la connotation péjorative du « sucré » au Japon, Le sucre, entre tentations et réglementations, 2014.03.13, Université de Haute-Alsace.

. FUJIMURA, Itsuko, Question de langue ou de culture? La connotation péjorative du « sucré » au Japon, manger, représenter: approches transculturelles des pratiques alimentaires, 2013.12.13, Université de Lyon.

. SUGIURA, Masatoshi, FUJIMURA, Itsuko, YAMASHITA, Junko, & LEUNG, Chi Yui, Native-like advantage in processing collocational expressions among Japanese learners of French, Eurosla23, 2013. 08.30, Amsterdam University.

. FUJIMURA, Itsuko & AOKI, Shigenobu, Typologie des collocations françaises et anglaises basée sur Log-r, 7ème Journées de la Linguistique de Corpus, 2013.09.06, Université de Bretagne Sud.

. 藤村逸子 & 青木繁伸, Log-r スコアの提案に基づく英語 Bigram の分析, 言語科学会第 15 回年次国際大会, 2013. 06.28, 活水女子大学.

. 藤村逸子 & 青木繁伸, 2 語の結びつきの強さを測る指標としての Log-r スコアの提案, 第 6 回フレイジオロジー研究会, 2012. 09.22, 関西学院大学.

. 藤村逸子, 杉浦正利他(6 名中 1 番目), アイトラッキングを使ったフランス語母語、話者のコロケーション知識の測定, 言語科学会第 14 回年次国際大会, 2012.07.01, 名古屋大学.

. 藤村逸子, 話し言葉における「みたいな」と「ような」: 文学と日常会話のデータに基づく通時的記述, Colloque international de linguistique japonaise, Langue japonaise en mutation, 2012.03.09, Université Paris Diderot.

. FUJIMURA, Itsuko, CHIBA, Shoji, & OHOSO, Mieko, Lexical and grammatical

features of spoken and written Japanese in contrast: Exploring a lexical profiling approach to comparing spoken and written corpora, GSCP 2012 International Conference, 2012.03.02, Universidade Federal de Minas Gerais.

. FUJIMURA, Itsuko, Etude sur corpus des groupes Nom + Adjectif de couleur dans la presse française, Colloque annuel de l'Association for French Language Studies, 2011.09.09, Nancy.

. 藤村逸子、フランス語の文法的性が問題である理由：フランス語の文法的性の不規則性について、関西フランス語学研究会, 2011.05.21, 関西大学.

. 藤村逸子、フランス語の報道テキストにみられる色彩形容詞を含む複合名詞：色彩語の名詞性と形容詞性、国際セミナー「日本語とフランス語：対照言語学的アプローチ」, 2011.05.15, 名古屋大学.

〔図書〕(計 4 件)

. FUJIMURA, Itsuko, CHIBA, Shoju & OHOSO, Mieko, Lexical and grammatical features of spoken and written Japanese in contrast: Exploring a lexical profiling approach to comparing spoken and written corpora, Proceedings of the VIIth GSCP International Conference : Speech and Corpora, MELLO, PETTORINO & RASO (ed.)2012, 393-398, Firenze University Press,
<http://www.fupress.com/Archivio/pdf%5C5673.pdf>

. 藤村逸子・滝沢直宏編、言語研究の技法：データの収集と分析、2011, 337, ひつじ書房

. 藤村逸子、多量の実例の観察に基づく言語現象の研究、言語研究の技法：データの収集と分析、3-24、ひつじ書房

. 藤村逸子、大曾美恵子、大島デイヴィッド義和、会話コーパスの構築によるコミュニケーション研究、言語研究の技法：データの収集と分析、43-71、ひつじ書房

6 . 研究組織

(1)研究代表者

藤村 逸子 (FUJIMURA, Itsuko)

名古屋大学・国際開発研究科・教授

研究者番号：50229035